

『洞谷記』と『永光寺中興雜記』

河 合 泰 弘

周知の如く、『洞谷記』は瑩山禪師晩年の行実を伝えるもので、現在のところ四本の写本が存在が確認されており、これらのテキストは概ね二つの系統（古写本・流布本）に分けられている。これらの二系統の特徴、つまり編集意図について、竹内弘道氏は両系統を比較することによって考察している。それによると、古写本は、明峰派と峨山派の対立の顕在化という時代を背景にして、大乘寺明峰派の正当性を主張することを意図した資料であり、流布本は、古写本より早い時代の意識、つまり、永光寺を中心とする瑩山禪師門下の、それまでの曹洞・臨済の融合的な性格を脱した曹洞宗としての宗派独立という意識が定着してゆく草創期の意識が反映されたものであるという。

大乘寺所蔵の古写本は、その奥書より、永享四年（一四三二）に書写されたものであり、その直接の原本となるものも、明峰・峨山両派の儀絶時の訴訟に関する文書を含むことから、訴訟の起こった応永二年（一四一五）までしか遡り得

ない。一方、流布本系は、三本ある写本の内、大乘寺に所蔵されるもの（以下、大乘流布本）が、享保三年（一七一八）の書写であることが判るのみである。そして、大乘流布本の原本は、末尾に「永光寺室中秘録」といわれるものであると記されているが、この「永光寺秘録」そのものは、既に散逸したと思われる、内容は、大乘流布本に比較的忠実に引き継がれていると考えられるものの、成立年代は不明である。筆者は、『宗学研究』第三七号にて、金沢浄住寺所蔵の『洞谷記抜書』の成立年代特定に絡んで「永光寺秘録」が中興の久外嫩良の永光寺住山期（一六三一～一六五一）には既に存在していたことを推察した。ここでは、新たに『永光寺中興雜記』（以下、『中興雜記』）という資料を取り上げ、その推察を更に進めようとするものである。

『中興雜記』は、永光寺中興久外嫩良の記録した瑩山禪師住山期以降の寄進状・禁制などを中心とするおよそ一〇〇点

の文書の綴りであり、その中に『洞谷記』から書写されたと思われる十数段を含んでいる。書写年は、奥書によると寛永一九年（一六四二）である。そのため『洞谷記』からの引用と思われる部分は、一七一〇年書写の大乗流布本からの書写であることは不可能である。これが永光寺に伝わる資料ということからも「永光寺秘録」に拠ると考えるのが妥当と思われる。これらの文章の素性を知るために、まず『中興雜記』に含まれる『洞谷記』に関係する部分の見出しとそれと対応する古写本および流布本の段落数を表にしてみた。

古写本	『中興雜記』	流布本
二二	〔四五〕洞谷山永光寺草創記 開山瑩山記	一
三五	〔四六〕山号事	一四
五四	〔四七〕山中有十境	二八
八一	〔六七〕素哲、予遺跡之僧祿也（素哲僧祿状）	七九
五	〔七八〕正中元年五月廿九日、始開僧堂	六四
六	〔七九〕同七月七日、総持寺住持職譲与	六五
	〔八四〕当山尽未来際置文	五四
七六	〔八五〕山僧遺跡寺々置文記之	五二
七七	〔八六〕諸門中悉知	五三
一五	〔八七〕正中二年七月二日、当山住次尊宿	七五
三八	〔八八〕開山行狀記	一六
六〇	〔八九〕元亨二年六月十八日、建勝蓮峯円通院	三〇
一三	〔九〇〕正中二年五月皇三日、発両願	七三
	〔九二〕山僧自去壬子歲、占此山（松樹禁制文）	七一

七	〔九二〕七堂額	六六
七八	〔九三〕明峯和尚之置文	
七九	〔九四〕此外諸寺事	
八二	〔九五〕住持職人可帶文書事	

これを見ると、古写本にのみ存在する段を含むとともに、流布本独自の段も存在することが判り、全体としてはどちらの系統に属するかはつきりしない。これらの段落は、単独の文書として現存するものも数段確認でき、それらからの書写ということも考えられる。では具体的に文章の比較をする。

まず両系統ともに存在する段を見る。〔四五〕は、ほぼ流布本と同一の文章であり、古写本との対比においては、「洞谷山永光寺草創記」というタイトルがないばかりか、字句の異同も甚だしい。〔七九〕でも、古写本にのみ大きな違いが見られる。例えば、「著法衣開堂」という部分が「法衣開堂着」に、「興聖三尺竹篋」という部分が「興聖自作三尺竹篋」となっている。〔八七〕も、『中興雜記』・流布本の間ではほとんど相違点がなく、冒頭に「正中二年乙丑七月二日」と日付を入れるのに対し、古写本では、末尾に「正中二年乙丑初秋二日」とそれを記している。〔八八〕のいわゆる瑩山禅師の「御自伝」の部分においても、『中興雜記』と流布本の間の違いは、僅かであるのに対し、古写本と比べる細かな違いが多々存在する。特に「三十五歳補任二代住持職」という部

分が、「三十五登大乘全座、補任二代住持職」となる点などが顯著である。「八九」は、いわゆる「円通院縁起」といわれるもので、瑩山禪師誕生の際のエピソードも盛り込まれているものである。ここでの最も大きな違いは、古写本にある「祈誓、即次日、母上洛尋女・為一生頂戴本尊」という四八文字の長文が、『中興雜記』・流布本には存在しないという点である。また、古写本では、禪師の幼少の頃の名「行生」とその由来をいうのに対し、『中興雜記』・流布本のもものはそれを述べていない。その他にも古写本には、細かな違いがいくつか確認できる。その他の段においても、『中興雜記』が、流布本に近いことが確認できる。

次に、瑩山禪師真筆として伝わる別の資料が存在する三つの段落だが、「六七」は、古写本・流布本共に同一文章であり、それらと比べると『中興雜記』のものは、冒頭に「洞谷門下僧祿御書曰」という部分が存在しないという違いがある。このことは、真筆本と共通し、それに加え、改行の仕方まで真筆本とのみ一致する。『洞谷記』ではなく真筆本もしくはその写しからの引用と思われる。「八四」は、古写本には存在しない段である。ここでは、先ず冒頭部分において真筆本が、「酒勾八郎頼親嫡女平氏女」とするのに対し、『中興雜記』は、「平氏酒勾八郎頼親女」、流布本は「平氏酒勾八郎頼親嫡女」としている点にとくに注目したい。これを見る限

り『中興雜記』は、流布本のものに近いことが判る。その他にも同様に考えられる部分が数カ所確認できる。しかしながら、流布本のもものと全く一致するわけではなく、真筆本・流布本の両本に共通する相違点も些細なものばかりではあるが、十数カ所確認できる。これらのことから、この段は、どちらかといえば流布本に近いものであるが、直接の原本となるものは確認し得ない。また「九一」も古写本には存在しない段落である。しかしこの段は、『中興雜記』のものに目付が記されていないという違いがあるだけであつて、判断の材料とはならない。

次に、流布本には存在しない段についてである。この部分は、古写本に拠るか、あるいは現存の『洞谷記』とは別の資料からの引用と言うことになる。

「九三」では、「評談」を「談合」とする違いが見られ、「九四」では、「光禪寺」という古写本にはない寺名が存在したり、末尾の「前住大乘(洞谷)紹燈素哲」が、古写本では「住大乘素哲」とするという違いが見られる。また「九五」では「住持職人可帶文書事」というタイトルに先立ち「淨住総持西堂位望時、管領畠山殿、訴詔目安也」とあるのに対し古写本では、タイトルの後に「明峰派峨山派儀絶時管領畠山方訴訟目安」としており、本文中においてもとくに後半部分に文章の違いが顕著に見られる。末尾の「自畠山殿返状」の

部分でも同様のことが窺われる。

これらのことを見てみると、これら三つの段落は、古写本との異同が甚だしく、古写本以外のものから書写されたものと考えざるを得ない。

ここまで見てみると『中興雜記』の中で『洞谷記』に拠ると思われる段は、「四五」～「四七」「七八」「七九」「八四」～「九一」の二三段であり、それはいずれも流布本系のものであると言うことができる。それは、やはり「永光寺秘録」と考えるのが妥当であろう。しかしながら、ここでひとつ疑問となるのは、段落の排列が、流布本のものとかんがりの食い違いがある点である。直接「永光寺秘録」に拠るのなら、流布本と排列を同じくしていなければならぬと思うのだが。あるいは、「永光寺秘録」の排列は、大乘流布本のものとは異なっていたのか。筆者が以前取り上げた、『中興雜記』と共通する『洞谷記』に拠ると思われる八編の文書を含む『瑩山和尚置文』（金沢淨住寺蔵）という資料は、その元本が嫩良の永光寺住山期に書写されたものであるが、排列が流布本とほぼ一致する。「永光寺秘録」が嫩良の住山期には既に存在していたと推察できることを考え合わせると、「永光寺秘録」が大乘流布本と排列を異にするとは考えにくい。あるいは、何らかの意図により組み替えられたとも考えられるが、『中興雜記』からはその積極的意図を汲み取れない。

このように「永光寺秘録」は既に大乘流布本に見られるような編年体の形態をもっていたと考えられるが、『中興雜記』がつくられた頃は、「永光寺秘録」は未だ編集の中途段階にあったのではないだろうか。流布本『洞谷記』は元来、瑩山禅師の日記・メモの類の雑多な綴りであったものを編年体編集されたものであると推察されている。その編集が行われたのが嫩良の住山期であったのではないか。確かに、流布本には、先に述べたように明峰峨山両派の儀絶が起る前の宗派意識が汲んで取れるのであるが、それは、流布本全体ではなく、独自に存在する部分の特徴に他ならず、流布本に組み込まれたところに、そのような意識がはたらいたとも考えられなくはないが、日記・メモの類の雑多な綴りとは別に伝わっていた瑩山禅師によるもの、または関係するものが単に組み込まれたと考える方が妥当と思われる。しかしながらこれらのことは、ひとつの推論に過ぎず、今後のより一層の調査研究が不可欠と思われる。今後の課題としたい。

興雜記

〈キーワード〉 流布本洞谷記、永光寺室中秘録、嫩良、永光寺中

（愛知学院大学非常勤講師）